海と蠟燭

UMI TO RŌSOKU

木崎さと子

海と蠟燭

木崎さと子

福武書店

木崎さと子（きざき・さとこ）
一九三九年、旧満洲新京市に生まれる。東京女子大学短期大学部英文科卒業。結婚により、七九年までで夫の勤務地のフランス、アメリカに滞在。八〇年、「裸足」で第五十一回文學界新人賞受賞。「裸足」「火炎木」「離郷」「吹き流し」「白い原」が第八十四回より連続五回、芥川賞候補となり、八五年、「青桐」で第九十二回芥川賞を受賞する。著書に『裸足』『青桐』（いずれも文藝春秋刊）がある。

海と蠟燭

一九八五年六月一〇日　第一刷印刷
一九八五年六月一五日　第一刷発行
定価一二〇〇円

著者　木崎さと子
発行者　福武哲彦
発行所　株式会社　福武書店
東京都千代田区九段南二―三―二八
〒101　電話（03）二三〇―二一三一
振替口座（東京）六―一〇五〇九七

本文印刷　図書印刷
平版印刷　栗田印刷
製本所　小泉製本
（落・乱丁本はお取替え致します）

©S. Kizaki 1985
ISBN4-8288-2152-X C0093
NDC913 194 256p

1985年

*

福武書店刊

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

海と蠟燭　目次

踏切 9
海と蠟燭 37
紫の木 67
楼門 91

茄子の花　129
祝賀会　165
あおきの実　203
冬至芽　217

裝丁　菊地信義

海と蠟燭

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

踏切

夕ごはんを食べ終えた時、幹夫はチロがいないことに気がついた。

「チロ、どうしたのかな」

幹夫の通っている市立中学が冬休みに入るのを待って、引越した。引越しといっても、工業試験場の構内にある宿舎から外の場長用公舎まで、歩いて十五分ぐらいのところである。大した荷物でもないので、試験場の若い人達が手伝ってくれて、冬至を過ぎたばかりの早い日暮れまでには済んでしまった。

声に出してから、義母の顔を見た。

「そうなの。いなくなっちゃった。さっき、たしかに連れてきたんだけど」

義母は小さな顔を父にむけて、ねえ？　と相槌を求めた。すっと切りつけても血もにじま

ないんじゃないか、と思うほど、きめの細かい膚が額や頬の骨の上に白く薄く張っている。
こんどの家も古びているが、場長用だけあって前の家よりはずっと広い。荷物を運び込んだだけで片づいていないせいもあるけれど、おそろしくさむざむとしている。
父は、聞えたのか聞えなかったのか、鼻梁の高い立派な横顔をすこしも動かさない。聞えていても、猫のことなぞ知らん、と口のなかで呟いているのだろう。父は学者で、引越しなどという雑事は大嫌いなのだ。中学一年の幹夫が覚えているだけでも引越しは三度目だが、その度に父は不機嫌になった。こんどは寒い季節だから、もっとわるい。和歌山育ちの父には、北陸の寒い冬がひどくこたえるらしい。
「連れてきたのよ。ちゃんと箱に入れて。Mさん、だったかしら、運んで下すったの」
こんどは幹夫の方に顔をむけた。濃い眉と濃い眸のあわいがせまく、ひどく真剣な表情にみえる。
「ぼく、見なかった」
幹夫はわざとそっけない調子で嘘をついた。義母がチロを煮干しで釣って捕まえて、箱に入れたのをちゃんと見ていた。通りかかった父が、この忙しいのにまた猫にかまっている、と言わんばかりに、あからさまに眉をしかめたのも見ていた。そういう父こそ、自分の手で

は何にもしないくせに。

その箱を誰が運んだのか、までは見ていなかったのは失敗だ。幹夫が自分で運んで、引越しが済むまで箱ごと物置にでも入れておけばよかったのだ。引越し荷物で散らかっているだけでも父の機嫌がわるいのに、その合間をチロが飛びかい運わるく父の足さきにでもひっかかったら、こ、とだ。ギャアッと悲鳴を上げるぐらい、蹴っとばされるだろう。猫の躰は柔らかいから蹴とばされても何ともないだろうが、義母の黒い眸にひき裂かれるような怯えが走るのが、怖い。父は、日頃は落着いたもの静かな男だが、苛ら立つと扉をおそろしい音をたてて閉めたりする。チロは二、三度蹴とばされて、父の傍には寄らなくなった。

「Mさんに電話して訊いてみようかしら」

義母は父の横顔をまた見上げた。そんなこと訊かないで黙って電話しちゃえばいいのに、と幹夫は思う。でも、どんなことでも父に訊いて、その言う通りにしないと父の機嫌がわるいこともたしかなのだ。

「M君を猫の番人扱いにはできん」

父は苦々しく言い棄てると、丹前に懐ろ手をしたまま、重たそうに立ち上った。寒いから前屈み気味だが、それでもおそろしく背が高い。小学校の五年生の時に幹夫は義母を追い越

したが、父には到底敵わない。大人になっても、父の背たけには追いつかないだろう。幹夫は覚えてはいないが、写真で見る死んだ母も大柄なひとだから、幹夫の背もけっこう高くなるのかも知れない。でも、そうはならないだろう、と思い決めている。

父は暗い廊下に出ようとして、荷物からほどいたまま散らばっていた縄に足をひっかけ、ちょっとよろめいた。苛ら立たしげな舌打ちをして、廊下の電灯を点けると、父は、幹夫、とふりむいた。

「……」

「縄だけまとめて片づけなさい。危くて仕様がない」

幹夫はすぐに立ち上って、言われた通りにする。父に言いつけられた仕事をするのは好きだ。嫌なのは、力の要りそうな仕事を父が義母に言いつけた時、父に隠れて片づけてしまうことだ。父に隠すだけならまだらくだが、できれば義母にもみつからずに片づけようとするのが一苦労だし、男らしくないことをこそこそやっているようで後ろめたい。そのかわり、苦心の甲斐あって父ばかりか当の義母までが、まるで自然現象で仕事が片づいてしまったふうにけろりと忘れきっている時なぞは、ほっとする。が、何といっても、父が義母ではなく幹夫に仕事を言いつけてくれれば、それが一番いい。そんなことはめったにないのだが。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com